

---

# 異世界に飛ばされて記憶をなくした少年の物語。

赤い人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界に飛ばされて記憶をなくした少年の物語。

### 【Nコード】

N1465Y

### 【作者名】

赤い人

### 【あらすじ】

とりあえず三人称で書いてみたいと思ったので書いて見ました。名前も失った少年がファンタジーワールドをどう生きていくかの物語です。

## 序章

少年は自分の状況をどうにか理解しようとした。昨日まで変わらなかった少年の寝室、昨日までであった普遍的な日常、そして昨日までであった少年の記憶……。何もかもが消え失せ、朝起きたらここは屋根裏部屋。フカフカの藁にシーツを敷いただけのベットに少年は寝ていた。外に出た先は一面の草原。向こうには山があるのみ。そう、少年は異世界に飛ばされていたのだ……！

限りなくファンタジーというジャンルがお似合いの世界。魔法が存在し、王政やらと少年の生きた世界とは常識が全く違うこの世界で、少年はどんな生き方をするのだろうか。

## 一話

先に言えば、まだ異世界に飛ばされる前の少年はかなり普通の日常を送っていた。普通に起き、普通の食事を食べ、普通に学校に行き、普通に友達がいて、普通に勉強して普通の家に帰って普通に寝て。

恐らく、これほどまでに薄っぺらい人生を送っている少年はいないだろう。その事を知ってしまったそいつは、彼に対してひどく同情でもしたのである。このまま、彼の人生を終わらせたくないと思ってしまったのである。だからそいつは、限りなく普通の日常とは程遠い所に移したのである。

ところで、そんな未知体験をした少年は、

「何処だここおおおお！！??」

普通の人ならば当然であろう叫び声を上げた。彼のような普通の日常を送っている人物ならば尚更だ。

「えっちよつとまって？ ここマジで何処？ 外見ればなんにも無い草原だし、ここだって俺の家じゃないし。てか俺だれー」

とそこで、少年はふと止まる。

自分は一体何者だと。

## 二話

「……」

少年は只々啞然としていた。以前、もとい昨日までの記憶がなかったのだ。なにも、真っ白に、少年は昨日までの記憶を思い出せなかった。自分が誰なのかだけではない。慕ってくれた友達、自分を産んでくれた両親、そして自分が住んでいた町の風景でさえ、彼の脳髄には一切の記憶がなかったのだ。そして少年にとって何より苦しかったのは、それを認識してしまう己だったのだ。

「……ひつく。おかあさん……」

ついに少年は涙を流し、やがて号泣し、もう顔さえも覚えていない母親の事を思い出そうとしていた。しかし、それは叶わなかったのだった……。

### 三話

ありったけ泣いた末、なんとか泣き止んだ少年は、ひとまず階段を降りて下の方を見てみた。するとそこには人はいなかったが、台所など少年がここで一人暮らしできそうならいの設備があった。とりあえず少年はここで生活をする事を決意し、ここらにある物を漁ってみた。すると、

「……ええ」

刃渡り6cmほどある両方に刃がある両刃の刃物、つまり長剣を見つけた。そして実はかなりの武器マニアだった少年は、すぐにこの剣の名称を思い出す。

「なんでこんなところに＜ロングソード＞があるんだよ……」

少年は呆れながら言った。＜ロングソード＞とは長剣としては一般的な部類にはいる剣で、西洋では広く使われていた武器の一つだ。その他にも沢山ある。一つは木を鉄で補強した盾だったり、皮の鎧や皮の膝当てや皮でできたバンダナ、最後は皮の小手を見つけた。どうやらこの、少年が飛ばされた異世界はかなりファンタジーな世界であるらしかった。普通家に、このような武器や防具があるはずないのだから。あるとしてもそれは観賞用が普通だろう。しかし、今ここにすぐにでも使えそうな武具が普通に並べられているのが事実だったりする。

とりあえず武器防具を見た事も着た事もなかった少年は、とりあえずそこにあつた装備一式を着てみた。すると、

「あ、ピッタリだ……」

思いのほかあつさりと着れてしまっていた。大きすぎてぶかぶかでもないし、小さすぎて窮屈そうでもなかった。それを思わせないほど彼は着こなせていた。まるですでに何十年間も着ていたかのような馴染み深い感触のように……。

「……」

少年は<ロングソード>も握ってみた。やはりかなり馴染んでいた。しかしそれでも、剣術はからつきしだっただからなのか（そもそも記憶がないのでそれを確かめようがないが）、振ってみてもあまり様になっていなかった。

「俺って、ここに住んでたのか？」

そうとしか考えられなかった。確かに見る物すべてはじめてだったが、この武具たちを着て馴染んでしまうのだから疑うのも仕方がない。だがしかし、考えてみればさっきの記憶を失ったことを認識していたことを思い出すと、

「……いや、やっぱりここは俺の住んでた場所じゃない」

少年はさっきのことが気になって仕方がなかった。そしてそれがこの結論を導いたのである。

とりあえず、今日一日、およびこの近くのことを書かれてある地図<sup>ツラ</sup>を見つけるまでここで寝止まって、地図<sup>ツラ</sup>みたいなものを見つけたらこの馴染んだ武具一式をもってここを立ち去ることを決めた少年だった。

## 四話

夜。既に空は暗くなり、月や星が照らす暗黒で美しい空となっていた。少年はひとまずカンテラに火をつけ、一階の部屋の辺りを明るくした。

この部屋を漁った結果、地図<sup>マップ</sup>はおろか多種多様の道具、この世界での貨幣と思わしきコイン、金目の物品などなど、今後生活して行く上で必須とも言えるような物が沢山あった。また食料も豊富にあり、数日は食住には困りそうにない。しかしここは、ここで目覚めたいと言え他人の家。地図を見つけた以上ここに長居するつもりは少年にはなかった。万が一この家の者が現れた事を考えて、明日の朝にでも出発する気でいたのだ。その為に少年は道具入れ袋に長旅に必要な物をパンパンに入れた。

その前に、少年は地図を広げてこの世界の全体図を見た。有難い事に手書きなのか、この家を中心に書かれていた。

北方角 - 地図で言う所の真上の方向には、小さながら町があった。他方の方角には町と思われるような物はなかったので、ひとまず少年は明日この方角に行く事を決めた。

そうと言われればあとは睡眠のみ。少年はすぐ出発できるように荷物を屋根裏部屋まで持って行き、フカフカの藁にシーツを敷いただけのベットに横になって眠った。

## 五話（前書き）

まだ完全に文章を確認したわけではないので、修正する可能性があります。

## 五話

朝、少年は夜明けとともに起き上がった。これが夢だと信じて覚めてくれると望んでいただろうが、そう甘くはなかったらしい。少年の見た景色は昨日見た景色と一緒に、フカフカの藁にシーツを敷いただけのベットに寝ていて、外を見れば一面は草原しかない。少年はため息をついた。

とりあえず少年は昨日打ち合わせた通り朝食を食べ、武具一式に着替えてすぐにこの家をあとにし出発した。夜明けとともに起き、出発するまでのタイムラグが少なかった為辺りはまだ薄暗かったが、この明るさでも足元がおぼつくので先に進んだ。

目指す場所は北方角にある草原にポツンと立つ町だ。少年はこの世界に来てからまだ一度も人にあつた事がない。町には人が大勢いるはずなので、ここが何処なのかとかを調べてみようと思っていた。この家で一人暮らしをしていた所で、到底何もわからないはずなのだから。

「……ん？」

日が完全に登って数時間。歩き続けていると、少年は人と思われし人影が見えた。それだけではない。馬車も見えて来て、荷台にはたくさんの人々もいた。

有難い。少年は心がはずんだ。こんなにも早く他人に会う事ができたのがそんなにも嬉しかった。

「すみません」

「はい、なんですか」

馬車に近づき話しかけると、その運転手と思われる白髪の老人が答えた。

「馬車に乗りたいんですけども」

「この馬車はイカーナの町行きじゃ。就くには半日かかるし金もかかる。それでも良いかい？」

老人が答えた言葉は、かなり警告風な感じだった。少年は一応、料金を聞いてみた。

「料金かい？ 10セントじゃ」

10セント……。この世界に生まれてきた訳ではない少年にはどれほどの価値かわからなかった。

とりあえず少年は、カバンから銅貨を10枚取り出し、白髪の老人に差し出した。白髪の老人は少年が差し出した銅貨10枚を受け取り、枚数を数える。すると、

「子供にしては金持ちじゃのう……。よし、乗りなさい」

老人は受け取った銅貨10枚を取り出した財布に入れ、少年を馬車に乗せてくれた。どうやら銅貨はセントというらしい。老人がボソツと言った言葉は気になるが、少年は今は足の疲れを取りたかった。少年は馬車に乗り、ひとまず次なる町の到着まで休む事にした。

## 六話（前書き）

今のうちにやっておこう登場人物紹介。

少年

名前不明。

主人公。突如記憶を失って異世界に飛ばされた少年。飛ばされる前はまだ世の中を詳しく理解できない中学二年生。実は乙女と見間違えるほどの美少年。普段はちょっと臆病だが、一人だと態度がでかくなる。

## 六話

老人の言うとおり、少年が乗ってから約半日で目的地『イカーナ』の町の着いた。なのですでに太陽は沈もうとしていた。

ここイカーナの町は、ここ以外の町を知らない少年には比べようもないが案外普通な町だった。店などもそれなりにあり、おそらく冒険に必要な物が準備できないなんてことはないだろう。

ひとまず少年は今日の寝床を確保するため、宿屋に向かった。すると道中、

「君」

と少年は肩を叩かれた。後ろを振り向くと、そこには少年と同じような防具を来ていた男がいた。

「もしかして君、新米冒険者かい？」

「え？」

と言われて、少し迷う。少年はこの世界に来てまだ二日ほどしかない人間だ。ここでの自分の存在価値も知らない少年は、どう答えるか迷っていたのだ。

そして少年が迷っていることに気づいた男は、

「ああ……悪い。どうも私たちと同じ武器を着ていたから、てつきりそうかとは思ったんだが……。悪いね、呼び止めて」

「いえ、すみません……」

思わず少年は謝ってしまった。

「いいんだよ。……そうだ。君、冒険者になってみるかい？」

「え、冒険者？」

思わず訪ねてしまった。

「ああ。どうやら君は人間の様だし、ここの宿屋にあるギルドで登録できる。如何だろう」

『冒険者』。少年はその言葉になぜか胸が躍ってしまった。なぜかその『冒険者』に惹かれてしまった少年だった。

それに、今後のこともある。いつまでも無職では、金の出所がなく金欠になっていくだろう。冒険者なら（命を懸けるであろうが）多少働かなくとも十分一攫千金を狙えるだろう。

「はい、やります」

少年は多少の覚悟の上で冒険者になることを志願した。

「よし、わかった。じゃあこれを持って、宿屋のマチスという男に渡すんだ。その男がギルドの登録を行ってくれる。良いね？」

「わかりました」

男は少年に書類を渡した。内容を見ると、どうやらこの男の招待状らしい。

少年は男と別れを告げた後、すでに辺りは暗く、非常に物騒だった。ひとまず少年は、寝床の確保を含めてすぐに宿屋に向かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1465y/>

---

異世界に飛ばされて記憶をなくした少年の物語。

2011年11月5日17時04分発行